

図書館を斜めに見る

守 川 正 道

大学に入って6年になる。入学していら
い図書館に入ったのはごく数える程の回数
でしかない。あの巨大な暗い建物、それは、
恐ろしく人を圧迫する。京都帝国大学図書
館の歴史がのしかかってくるようで、耐え
られないのである。本は好きなのでよく読
む方だと自負しているのだが、図書館にな
じめないのは何故だろう。官僚的と思ひ込
んでいるからそう見える制服を着た係りの
人が、こわいのだろうか。だが実際、親切
な人がほとんどなのだからこれは図書館の
敷居が高いという原因ではなさそうだ。カ
ードをめくって図書借り出しを依頼する
というこのめんどくささであろうか。かな
り根拠はあるが、これもいたしかたない手
続の一つであろう。では、あの大きな部屋
の中で、(全くこの天井の高さといったら
ずいぶん無駄な建物だと思うが、同時に妙
な圧迫感もあるから不思議だ)大きな机を
前にして、女性でも前に座ってはくれない
かと半分期待しつつ、実際は、自分と同じ
ようなオノコが座って、幻滅する、という
ことであろうか。だがこういう気分のとき
は、もはやすでに勉強をしようという段階
ではあるまい。本当に読むことに専心して
いるときは、まわりはそう気にはならない
はずだから、あれこれ考えてみて次のよう
なことに思い至った。元来図書館の用法、
といっても、現代に生きる者の使用するが
わからなかった用法だが、これには二つある
と思う。一つは、図書館の蔵書を借りて読
むということ。ただしこれはあくまでも、
借りるという点に力点がおかれる、なぜな

ら借りた以上、研究室で読もうが自宅で読
もうが文句をいわれる筋はないから。もう
一つは図書館とい場所を利用して本を読む
ということである。もっとも図書館で待ち
あわせをすることもあるが、ここではやは
り、図書館の机を使って読書するというこ
とにしたい。この後者の利用者が現在の我
々のまわりでは圧倒的に多いといえるので
はなかろうか。試験期になると百貨店の特
売場みたいになるのはその典型である。か
くて現代は図書館の利用者は、図書の利用
ではなく、館＝場所の利用者が圧倒的とい
えると思う。

かく考えたとき、おのれの図書館を敬遠
する原因がわかった。

前者の用法つまり図書の利用という点に
関しては、本というものは題名だけでは内
容がほとんどつかめないということからく
る。我々はまだまだナマの資料(だれそれ
の日記とか公文書など)を使うには力よわ
く、いわゆる解説書の類になる。その内容が
わからず借りて読んでみるというノンキさ
(というよりもこれぐらいにならねばなら
ぬのかもしれないが)を持ちあわせていない
のである。かくて open 式の学科閲覧室や
A.C.C.へ、そして古本屋へと足がむく。後
者の用法、場所の用法は、あまりに人の出入
りがひんばんであることから落ちつけない、
同時に賢そうな顔付きにあてられて退場
ということになってしまう。

かくて今でも汚い下宿で本をめくるので
ある。

(文学部西洋史学科)